

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	近詠十首 : 短詩 : 文苑
Author(s)	そまを
Citation	龍南會雜誌, 87: 45-46
Issue date	1901-10-18
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5227
Right	

東しらみて鳥なきて、

露ふき拂ふ朝風に、

帽かたひけて塋道を、

迷ふさきりに消えてゆく。
若き姿を袖かみみて、

門の柳に送る少女子。

短詩

近詠十首

飯田松聲をいたみて

松一里磯山つゞく此濱べうつゝに君を見るよしもなき
松蔭をどはのみくらと定めます君さちありとせめていはや
友ひとり君をしぬびて墓になく心つたへよ松風の聲
浦波の音もまじりて響くらむ君みが墓の松風の聲
わもひかね君がうつし繪とりいでゝひかへば落つるわが涙かな
旅包つゝみ終りてさらばいさ立むとすれば雨ふりいでぬ
今はとて名残を惜しむ朝戸出の旅の衣にちる萩のつゆ

わかれつらしつらしとはいへ人の世のさだめなりとこそ思へばぞた
親をおきて今日立つ旅のつらき哉雲のゆくへの定めなき世に
さめだめなき雲のゆくへを眺めやりて夕た、すむ白杵川の畔

紅葉會詠草

鶴

山

何事か罵りあひて右ひだり別れ流る、いさら川の水
亡き母に手向けむ花を手に持ちて並木の影を一人行くかな
穂芒に旅人通る笠見えて十里の大野只秋の風
知らずして足ふみこめば落柴の下を流る、谷合の水

ありさ

朝顔の露の命といはであれ朽ちぬ生命をわれしめしてん
吾妹子と泣きて別れし楡の蔭に白百合二つ露帯びて香る
赤く匂ふ百合の一輪手のはらに入れてよるこふ吾が末の妹
今朝摘みし百合は紫紫の百合こそ妹が髪にふさはむ

大みき

吾家の榎をはるか前に見て歸る此身の心うれしき